

## 日本武道に見られる思想の研究（その5） －日本武道における「修行」の一考察－

ビットマン ハイコ

### はじめに

日本武道の場合、スポーツと違って「練習する」、あるいは「トレーニングする」という言い方よりは「修行する」「稽古をする」という言い方が一般的であろう。選手はある組織や団体から代表として選ばれた者という意味から武道でも用いるが、競技者という言い方よりは、「修行者」が普通である。

このような慣習的言葉使いは、日本で「修行」を積む「修行者」には理解できるとしても、国際的な普及の場ではやはりその差異の説明が求められる。即ち、つきつめれば「修行」とは何かということである。

まず、先行研究を検討してみよう。武道の歴史的成立過程と「修行」の概念はどのように理解されているのだろうか。一つの例として、前林清和を取り上げてみよう。

「修行という言葉は、本来、仏教用語である。湯浅泰雄は、修行を『身体の訓練を通じて精神の訓練と人格の向上を目指す実践的な企て』と述べており、一般的な言い方をすれば、身体の訓練を通じて「悟り」を目指すことである。…武芸においても、その成立過程において、単なる殺傷技術の獲得のための練習ではなく、技の訓練を通じて人格の向上を目指すようになった。その理由は、武芸流派が誕生した中世において、武芸流派の開祖といわれる人物の多くが、宗教家であったり宗教と深い繋がりがあったこと。また、常勝を得るためには、単なる身体的能力や技術力だけでは、不可能であり、精神的な安定や駆け引きが必然的に求められるようになった。このように考えるとまさに、生死をかけた立ち合いの場は、修羅場であると同時に修行の場でもあったのである。さらに江戸時代以降平和な時代を迎え実戦の場面が少なくなり、武芸の実戦としての価値が低くなっていった。そのような状況下、武士に求められる為政者としての人格陶冶の必要性和相俟って、必要性の価値はその実戦的な意味合いよりも、技の修行を通じて精神の深化と人格の向上をめざす修行としての意味合いに重点がおかれるようになっていった。このような流れのなかで、武芸者たちは、坐禅などの瞑想修行を積極的に取り入れていったのであり、…「型」修行そのものにも瞑想としての性格が求

められるようになっていった。したがって、単に練習や鍛錬という言葉ではなく、修行という人間陶冶を目指す言葉を使用したものと考えられる」（前林清和，2006，126頁）。

この前林の示唆に富む記述を参考にしながら、ここでは武道思想における「修行」をとりあげ、「修行」は武道にとって、どのような意味をもっているのか、また、これまでの古い武道文献ではどのように説明されているのかについて、検討して行きたい。

## 「修行」の概念試論

「しゅぎょう」を漢字にする時、「修行」と「修業」の2つがあることに気づく。この2つにはどのような差異が見られるのであろうか。例えば『広辞苑』は「修行」について、次のように述べる。

〔仏〕(ア) 悟りを求めて仏の教えを実践すること。(イ) をして巡礼すること。精神をきたえ、学問・技芸などを修めみがくこと。また、そのために諸国をへめぐること。『武者修行』(新村出編，1998，1272頁)。

また、「修業」は次のように説明される。

「学業・技芸などを習いおさめること。しゅうぎょう」(新村出編，1998，1272頁)。つまり、これらによれば、「修行」は、本来仏教に由来する言葉である。また、武道では「心技体」とよく言われるが、「技」・「体」とともに、常に求められている「精神」、いわゆる内面的な「心」の鍛錬が「修行」の場合のみに定義されていることになる。例にあげている「武者修行」も、武道との関連を強く示唆しているように思う。

しかし、松本皓一によれば、「修行」は本来仏教に由来する言葉であるとしても、近年その意味は次のように変化を見せているという。

「仏道修行ということばで代表されるように本来は宗教上の目的実現のために課せられた身心鍛錬の組織的な実践である。…また宗教の世界ばかりでなく一般の世俗社会でも、諸芸諸道に熟達するために師匠を求めて腕を磨くことを修行という。この場合でも単に技を習得するのみでなく、技とともに人間をもつくるという精神的意味が含まれていたが、近年この意義はきわめて希薄となり、修行は修業あるいは習業への傾斜を強めている」(小学館，2000，CD-ROM)。

例えば、ある資格を取得するための教育を受ける期間を修業年限などと表記することがこれに当たるであろう。そもそも、武道は、ほかの芸道と同様に「道」であり、この道を行くという意味でも、「修行」のほうがより原義に近い。つまり、武道の場合、「修行」という概念は、歴史的にみても「ワザ(技・業)」を修めるという意

味合いが強いと思われる「修業」よりも、いわゆる心や精神的な向上発展をより強調しているように思われるのである。

それでは、「修行」は武道にとって、どのような意味をもっているのか、また、どのように説明されているのだろうかを見てみよう。

まず、江戸時代に武士のステータスシンボル<sup>1</sup>となった「大小」における剣の道に関しては、どうであろう。例として、沢庵宗彭禅師が柳生新陰流の剣豪柳生宗矩に与えたとされる江戸時代初期の『不動智神妙録』の中には、次のような解釈が見られる<sup>2</sup>。

「理之修行，事之修行，と申す事の候。理とは…至りては何も取あはず，唯一心の捨やうにて候。…然れども，事の修行を不<sub>レ</sub>仕候えば，道理ばかり胸に有りて，身も手も不<sub>レ</sub>働候。事之修行と申し候は，貴殿の兵法にてなれば，身構の五箇に一字の，さまさまの習事にて候。理を知りても，事の自由に働かねばならず候。身に持つ太刀の取まはし能く候ても，理の極り候所の闇<sup>くら</sup>く候ては，相成間敷候。事理の二つは，車の輪の如くなるべく候。

〔現代語訳〕理の修行，事の修行ということがあります。理とは…究めつくしたら，何にもとらわれず，無心になる道です。…しかしさらに事の修行をしなくては，道理ばかりが胸の中にあつて，身も手も自由に働きません。事の修行というのは，あなたの兵法でいえば，身構えの五つを，絶対の一に帰するものとして，さまざまに習うことです。道理を知っても，それが実際の上に自由に働かなくてはなりません。身のこなしや太刀の扱いがよくても，理の極まる所に暗くてはなりません。理の修行，事の修行の二つは，車の両輪のようではなくてはなりません。」  
(市川白弦，1978，229頁)。

また，唯一刀流の古藤田弥兵衛俊定が1664年に著した『一刀斎先生剣法書』の中には次のような記述がある。

「夫れ当流剣術の要は事也。事を行ふは，理也。故に先づ事の修行を本として，強弱・軽重・進退の所作を，能く我が身軀に是を得て，而る後其事敵に因て転化する所の理を能く明らめ知るべし。たとへ事<sup>わざ</sup>に功ありと云ども，理を明に知らずんば勝利を得がたし。又理を明に知たりと云ども，事に習熟の功なきもの，何を以てか勝つ事を得んや。事と理とは，車の両輪・鳥の両翅のごとし。事は外にして，是は形也。理は内にして，是は心也。事理習熟の功を得るものは，是を心に得，是を

1 独語：Statussymbol =地位の象徴。

2 『不動智神妙録』は沢庵によって1628-1632年の間に著わされたとされている。

手に応ずる也。其至に及んでは、事理一物にして内外の差別なし。事は即ち理也、理は即ち事也。事の外に理もなく、理を離れて事もなし」(今村嘉雄, 1982, 261頁)。

[現代語訳]「そもそも、わが流儀の剣術の核心は技である。そして、この技は道理に基づいて行なわれる。ゆえに、まず技を修行することを第一として、心身の働きの強弱、軽重、進退をよく会得し、そのうえで、敵の働きに応じてわが技を変化させる道理を十分に理解すべきである。たとえ、技の修行を十分に積んでいようとも、道理がわかっていなければ勝利を得ることはできない。道理をよく理解し、[...]<sup>3</sup>しかも技の習練をよくしているものは、その道理を心で理解したうえに技術のうえに活かすことができる。このことに熟達すれば技と道理とは一つに融け合って、その差別はなくなるのである。技は道理、道理は技、技以外に道理はなく、道理を離れて技もありえない」(吉田豊, 1968, 115-116頁)。

この二つの例では、技(と体)と心の偏らない修行が強く求められていることが分かる。「心技体」の統一した修行が武道の課題であり、片方だけを鍛錬しても修行とは言い得ない。偏った鍛錬は「道」の「修行」とつながらないのである。「道」での「修行」は、常に技や体の鍛錬で、心を養わなければならない。

前に述べられたように「修行」という概念は、近年になって、その意味が変化し、「修行は修業あるいは習業への傾斜を強めている」。武道の一つである空手道を例としてあげると、富名腰(船越)義珍が著した著名な『空手二十箇條』<sup>4</sup>第九条「空手の修業は一生である」(慶應義塾空手研究会, 1930, 2頁)の中には、あえて「修業」が使われている。富名腰は、武道特有の「業(技)」を大事にしながら修業することが、内面的なエレメントである心・精神を練り上げる修行につながることを強調したかったのかも知れない。

いずれにせよ、この味わい深い格言の意味をもう少し詳しく検討してみよう。

和道流空手道の大家博紀は『空手道第一巻』の「師範語録」の中で、短歌のかたちをとって、次のように述べている。

3 吉田の現代語訳に使われている版は『日本武道大系 第二巻 剣術 (二)』の版とは異なっている。

4 富名腰が『空手二十箇條』をいつ著作したのかは、明確ではないが、「慶應義塾空手研究会」1930年11月27日発行の『こぶし』という会誌の創刊号には掲載されている(慶應義塾空手研究会, 1930, 1-2頁)。

「武の業は 宇宙の如く 無限にて 業に極致は なきものと知れ」（大塚博紀，1970，11頁）。

また、武技を固定形の球ではなく、「気体の球」であるとして次のように比喩的に述べる。

「…武技は卓上をまろぶ固定形の球転ではなく、空間をまろぶ柔軟な気体の球転である。固定形の球は平面の上はスムーズにまろぶが凹凸面は滑かにまろばない。…武技は気体の球の如くその変化には極限がなく宇宙の如く無限大である。宇宙の如く無限大であるから空である。無限の空であるから全てを抱擁して和となすことができる。宇宙の如く無限の空であるから武技には極致の技はない。その技は千変万化無限大で宇宙の真理に通ずる」（大塚博紀，1970，10頁）。

このように、武技の柔軟性と無限性を強調し、武技の修行が一生続くものであることが強調され、次のようにまとめられている。

「武技の修業は終生であり、終生の修業でもなお満ちたりない。武技に極致はないからである」（大塚博紀，1970，16頁）。

ちなみに、糸東流の摩文仁賢和が仲宗根源和と共に著した『空手道入門（別名空手術教範）』第十章「空手道修業者の心構」の中にも「技法無限慢心無用」という節がある。

「空手の技法が無限であり、その道を日々夜々に精進する者に何で慢心などが起こり得ませうか。精進を怠る意志にこそ慢心の苔は生えるのでありますから温恭謙虚ただ無限の技法を追ふて研究を怠ってはいけません。…人に示したい、人に勝ちたい、人に誇りたい、これは他人のためにやる修業であって、これでは慢心の雑草が心中にはびこり、何時の間にか横道にそれてしまひます。それではいけません。他人の為の修業ではなく、自分自身が止むに止まれぬ空手修業の楽しみを味はふのでなければ、此の無限の道をたどって行けるものではありません」（摩文仁賢和，仲宗根源和，1938，86頁）。

いうまでもないが、このような修行観は空手道だけに止まらず、他の武道にも及ぶ。武道修行は、例えば初心者から段位の高いものまでさまざまな段階が存在するのかもしれないが、それにしても、終わりはないのである。

このことを『葉隠』は「聞書第一」の中で、次のように述べる。

「或剣術者の老後に申し候は、『一生の間修業に次第があるなり。下位は修業すれども物にならず、我も下手と思ひ、人も下手と思ふなり。この分にては用に立たざるなり。中の位はいまだ用に立たざれども、我も不足目にかゝり、人の不足も見ゆるものなり。上の位は我が物に仕なして自慢出来、人の褒むるを悦び、人の

不足をなげくなり。これは用に立つなり。上々の位は知らぬふりして居るなり。人も上手と見るなり。大方これまでなり。この上に、一段立ち越え、道の絶えたる位あるなり。その道に深く入れば、終に果てもなき事を見つくる故、これまでと思ふ事ならず。我に不足ある事を実に知りて、一生成就の念これなく、自慢の念もなく、卑下の心もこれなくして果たすなり。柳生殿の、「人に勝つ道は知らず、我に勝つ道を知りたり。」と申され候由。昨日よりは上手になり、今日よりは上手になりして、一生日々仕上ぐる事なり。これも果てはなきといふことなり』と」(和辻哲郎・古川哲史校訂, 1987, 40-41頁)。

## まとめ

上に述べたように、日本武道における「修行」とは、武道を単なる一時的に、技ないし身体的に、「トレーニングする」ことだけではない。「技」・「体」の鍛錬を通じて「心」を修養し、そしてさまざまな「修行」の段階を経て、最高レベルの段階に到達することにおいて、生涯「われに勝つ道」が続くのである。というのは、完璧に仕上げられた「技」というものは存在せず、体を用いた技を通じて自分自身の全体を「修行する」しかなく、それには終わりが無いからである。それであるからして、一人の「修行」は無限の可能性であり、人生のある限り無限に続く。即ち、武道において「心技体」を修めようとする場合、「修行は一生である」ということがらがこれらの文献から共通に読み取れる。そもそも湯浅晃によると、

「…世阿弥が芸能の修練を『終生修行』(『習道』)としていち早く確立した…、また武術、とくに柳生新陰流剣術や宝蔵院流槍術が能との文化的交流を通じて多くの技法・心法をとり入れ、武術が武芸へ、そして『道』へと思想的に発展していったという歴史的経緯がある…」。(湯浅晃, 2001, 13頁)。

このように、現代武道でも言われる武道「修行」は「一生である」という理念は、能楽で最初に言われたようであり、のち「武」の世界や思想にも影響を及ぼしたと考えられる。したがって、武道だけではなく、もろもろの芸道においても「道」の人間全体的な完成を目指す修行は一生であるという解釈ができよう。

【参考文献】

- 市川白弦 (1978) 『日本の禅語録・沢庵・第十三巻』, 講談社。
- 今村嘉雄 (1966) 『日本武道全集』, 人物往来社。
- 今村嘉雄 (1982) 『日本武道大系 第二巻 剣術 (二)』, 同朋舎出版。
- 大塚博紀 (1970) 『空手道第一巻』, 大塚博紀最高師範後援会。
- 慶應義塾空手研究会 (1930) 『こぶし』 創刊号, 慶應義塾空手研究会。
- 新村出編 (1998) 『広辞苑』 第五版, 岩波書店。
- 小学館 (2000) 『スーパー・ニッポニカ2001 [ライト版]』 (CD-ROM)。
- 藤堂明保 (2000) 『学研 漢和大学典』, 学習研究社。
- 中村民雄 (1994) 『剣道事典・技術と文化の歴史』, 島津書房。
- Bittmann, Heiko. *Karatedô – Der Weg der Leeren Hand. Meister der vier grossen Schulrichtungen und ihre Lehre. Biographien – Lehrschriften – Rezeption.* Ludwigsburg und Kanazawa: Heiko Bittmann, 1999.
- Bittmann, Heiko. *The Teachings of Karatedô.* Ludwigsburg and Kanazawa: Heiko Bittmann, 2005.
- ビットマンハイコ (2006) 「私が学んだ武道の名著から・第11回 空手の修業は一生である」, 『月刊武道』 2月号 (通巻471号), 日本武道館, 90-93頁。
- Bittmann, Heiko; Niehaus, Andreas. *Schwert und Samurai (剣と侍). Traktate zur japanischen Schwertkunst.* Ludwigsburg und Kanazawa: Heiko Bittmann, 2006.
- 二木謙一, 入江康平, 加藤寛 (1994) 『日本史小百科・武道』, 東京堂出版。
- 前林清和 (2006) 『近世日本武芸思想の研究』, 人文書院。
- 摩文仁賢和, 仲宗根源和 (1938) 『空手道入門 (別名空手術教範)』, 京文社書店。
- 湯浅 晃 (2001) 『武道伝書を読む』, 日本武道館。
- 吉田 豊 (1968) 『武道秘伝書』, 徳間書店。
- 和辻哲郎・古川哲史校訂 (1987) 『(岩波文庫) 葉隠・上』, 岩波書店。

## The Term "Discipline" (*shugyô*) in the Japanese Ways of the Martial Arts

Heiko BITTMANN

In the traditional Japanese Martial Arts (*budô*) the term *shugyô* is often used. It can be translated as 'training', but the translation 'discipline' is more appropriate to the far-reaching meaning of *shugyô*, which goes beyond pure physical and technique-based training. For example, we can find in *budô* the important precept: "The discipline is for a lifetime" (*shugyô wa issho de aru*). Because there is never a perfect heart, technique or body (*shin gi tai*), the discipline does not end at a certain point; the discipline of the traditional Japanese Martial Arts is for a lifetime.

The term *shugyô* was originally from Buddhism and describes, simply put, the search for enlightenment (*satori*). The aim of this study is to shed light on how *shugyô* is explained in Japanese literature on *budô* and what *shugyô* means for the practitioner of traditional Japanese Martial Arts.